

## 雁の空

首藤 静夫

雁やのこるものみな美しき 石田波郷

波郷は昭和十八年、長男が誕生した年の九月に応召、華北戦線へ赴いた。掲句は、召集令状を受け取った後の一句だ。雁は秋になると北方から寒さを避けて日本に渡ってくる。自分は今から寒地に向かうのだ。日本の空はおそらくこれが見納めだろう。本人自解では、「・・・何もかも急に美しく眺められた。それら悉くを残してゆかねばならぬのであつた——以下略」

このくにの空を飛ぶとき悲しめよ南へむかふ雨夜かりがね 齋藤茂吉

昭和二十年、敗戦。故郷の山形県・上山に疎開中の一首。焦土と化した日本列島への哀れみ、慈しみが交ぜになった歌である。茂吉は当時、肋膜炎で病臥中だった。

雁は日本、特に東日本には広く飛来した。国定忠治が眺めた、森鷗外も見た。それが東京の空などではまったく見られなくなった。個体数が減ったのだと思っていいたら、宮城県などでは逆に激増しているという。同県北部の伊豆沼周辺で長年観察をしている呉地政行氏の文章を読むと、一九七〇年初頭には同エリアで五千羽ほどだった個体数が今は十万羽だそうだ。

しかし素直には喜べない。日本各地に分散して越冬していた雁が一極に集中し、湖面を蔽い尽くしている。大集団だけに水質悪化で壊滅的被害を受ける心配がある。また、感染症が発生しやすく、それが拡散するリスクもありそうだ。

同氏によると、雁の増えた要因の一つはシベリアの温暖化である。永久凍土が溶け、草が生い広がるので鳥類が繁殖しやすいのだそうだ。日本に来る雁も茂吉の歌のような、南にむかう必要がない。北日本の上昇した気温で充分なのだ。渡りの途中に立ち寄った北海道や秋田で飛行をやめ、そこで越冬するずばら(?)組もいるそうだ。

雁は渡り鳥の代表として古くから詩歌に沢山詠まれてきたが、現在の東京ではせいぜい不忍池の川鶉で代替し我慢する他ない。生き物と自然の関わり合いは微妙で難しい。

雁はいづこの空か秋の暮 しじぶを